# 文化の秋

## 大牟田美術展に

### 姉川さん 宮脇さん

十一月五日から九日まで第三十一回「大牟田美術展」が大牟田市労働福祉会館で開かれました。

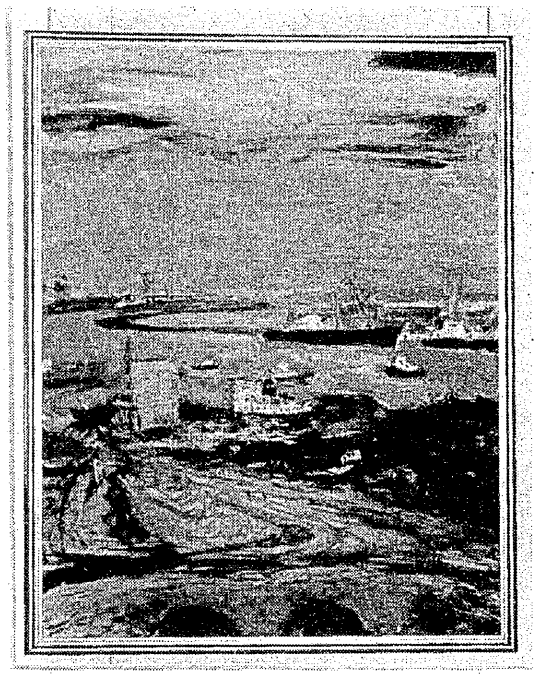
この美術展は毎年開かれており、洋画、日本画、書道、写真、染色の五部門あわせて六百四十点の応募作品が寄せられ、審査の上、入賞作品、入選作品の約半数が展示されました。

応募作品は、洋画部門が五百点の応募でいちばん多く、その中で姉川良男さん（十八分会・港務）と宮脇好光さん（十分会・三川）の作品も展示されました。

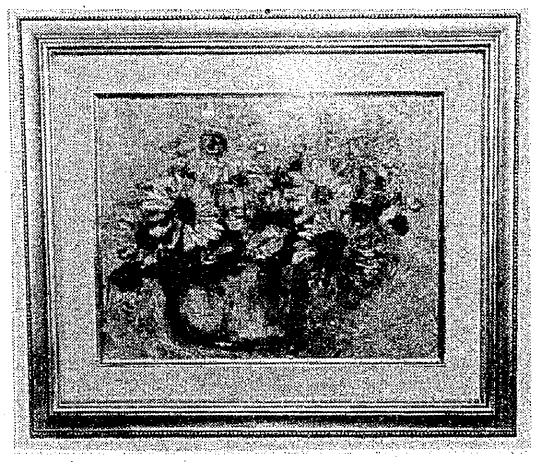
姉川さんは、同展の発会いらいの会員で、展覧会委員として応募作品の審査に当たり、五十号の作品「港」を出品しました。

宮脇さんは、昨年につづいての入賞で八号の「ひまわり」を出品しました。カラーで紹介できないのが残念です。

なお、同会場では新しい大牟田市民会館の建設基金を集めるために、美術協会会員の出品による色紙展示即売が行われました。



姉川さんの作品「港」



宮脇さんの作品「ひまわり」

# 囚人労働遺跡を訪ねる ⑤

## 駛馬説教所跡

小崎文人

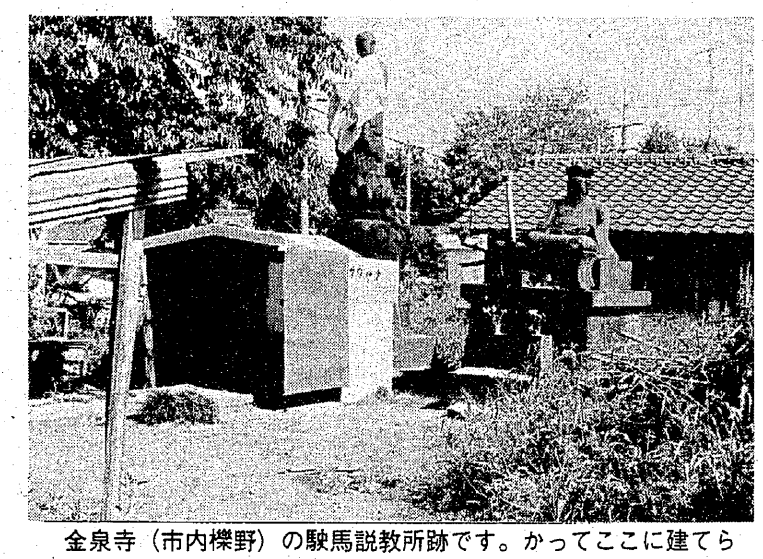
大牟田市米生町一丁目、米生中学の北西にあたるところ。アスファルト道路からちょっと高い木の繁みの下陰、台石の上に高く立つ石の仏像があります。地蔵菩薩と見ますが、かたわらにその仏像をお守りするかのように、閻魔像も立てられております。何を隠そう、これこそ曹洞宗金泉寺駛馬説教所跡なのです。先々代の遠山住職は、事実よくこの説教所に出向いては、集まる信者たちに法話を行なっていたものです。

駛馬説教所は、今は御堂など影も形もなく、すっかり忘れ去られてしまいましたが、ほかでもなく三池集治監に長く収監され、三池炭鉱の苦役に駆り立てられていた囚人たちが、その苦しいフトコロから金を出し合って造営したところです。せめてもの心の救いを、きっと仏の道に求めたのに違いありません。

金泉寺駛馬説教所のことについて、三池郡誌（大正十五年六月発行）は次のように述べております。

「特に三池監獄の免囚等壇信徒と謀り、悔悟の念より大願を発起し、努力の労銀を喜捨し、建物を設け、仏体、仏具、什器、日用の諸道具を購入し、法人とする設備をした。依て……衆民を利済し、諸人の欲求を満す目的で、大正十年八月三十日地方庁の許可を得て、此の地に設立した。管理者並に担任教師は玉川村金泉寺の住職遠山良寿……」

そして、さらに「建物は木造亮葺平家建十四坪七合五勺である」、同郡誌にありますとおり、建物などすべて、つい太平洋戦争後までこの場所にあったのでした。ところが戦後大牟田を襲った台風のため御堂は瓦解、大損害をこうむったのです。さいわい近所の家々の人が寄進し、その跡にはさっそく仮の住まいが建てられました。でも悲しいことに、今は仮住居もなくなり、ただ木下陰に立つ地蔵菩薩像や閻魔大王像、ほかに並ぶ数体の粗末な仏像だけが、わずかに昔をしのばせております。たとえ今、御堂の影こそ見られなくとも、せめてその跡は大切に保存していきたいものです。



金泉寺（市内櫟野）の駛馬説教所跡です。かってここに建てられていた御堂は影も形もなく、立っているお地蔵さんの前にはよく香の煙がただよっています。

# 好天に恵まれて 嬉野温泉へ

12分会（三川・坑外）

各組ごとに行なわれていた旅行を、今回から分会全体でやろうということになり、十月の連休に嬉野温泉―吉田屋旅館に一泊旅行と決まった。

最近の退職者にも呼びかけたが、十日は体育の日、大安などで退職者二人を含めて十四人の参加。

十日は大牟田郵便局前を十一時、旅館の送迎バスで出発。まもなく酒やウイスキーが出る。カラオケも持ち込みで、ほどなく歌も流れだす。

途中、有田焼を二カ所見学。目についた最高の値段は、飾り皿の大きいのが二百五十万円。三時に旅館へ入る。

お湯は、さすが温泉だけあり気分がよい。質は山鹿の湯のように、ぬるぬるしている。宴会は三時間半におよび、みんな心ゆくまで飲んで歌う。

女中さんに嬉野の旅館の数を聞いたら八十軒、買物に出て店でたずねると五十三軒、おでん屋で聞くと百軒、あまり多くて数もつかめぬようだ。

翌十一日は、旅館を十時に出て祐徳稲荷神社へ。相かわらず人出は多い。山を背にした神社は美しい色をしている。放し飼いの鶏のチャボが数十羽境内で遊んでいる。大きな銀杏も黄色の実をつけている。数は少なかったが、楽しい旅行だった。

（この項、牧薗災幸・記）

# 四小分会が 日南海岸へ

十月二十四～二十五日にかけて四小校区地域分会では、分会員と退職者十七人が参加して、宮崎・日南へ団結旅行を行ないました。マイクロバスを利用しての七百キロメートルをこえる行程でしたが、和やかに過ごすことができました。

# 釣りキチ天談

## ボラ掛け釣り（二）

連載第十五回

十一分会（三川）　石田鈍竿

ボラ掛けは、十一月下旬から三月中旬の寒期が最適期である。先輩達の言によるとアカメ・ボラは冬期になると、脂肪が網膜にまでまわり物がかすんで見える。また、体にヒルがついているのでかゆく、石などにこすりつけにくる。海底できらきら光るのを見つけ、針とは知らずに体を寄せてくる、ということになる。魚にとっては運のつきである。

冬期のアカメ・ボラは格別にうまく、刺身よし、吸い物によし。三枚におろして味噌漬にし、四日ほどで口に入れると眼が細くなるほど美味である。うすといわれる胃を生で食べると、こりこりしてまたうまい。釣る、食べるの俺にとってはよくぞ釣りを覚えたりである。

新しい四ツ山鉱ができる前、もう釣り者も板について知人も増え、『オッス！』てな具合である。

その日はどんよりとくもり、底冷えがして、ちょっと着過ぎかなと思ったが、丸まると着ぶくれしてしゃくっていた。

『きたッ』

穂先が「グーン」と糸鳴りとともに大きく曲がり、竿がばりばりと鳴いている。

『六百匁かな、いや、八百匁はあるぞ。いいぞー』

針に返りがないので、ゆるめたら、はいそれまでよ、である。『ヨーシ』と竿をしぼり込み徐徐に立てていく。

姿を現わした魚は想像よりも大きく、ひい気目ながら一貫目はあるようだ。

「グーン」と力を入れ浮き上がらせたが、あとは竿が曲がるばかりで水を切れない。

仕方ないので隣りの釣り友に竿を上げて間を空けてもらい、張り綱をゆるめ、そちらの方にまわり込ませようと一歩足を出したとたん、根綱に足をとられ、そのまま頭から「ドボーン」と海に落ちてしまった。

幸いケガはなかったが、着ぶくれしているので泳げない。あっぷあっぷである。友人達の投げるロープもつかめず、五メートルぐらい流されたろうか、『つかまれーッ』という声が飛んできた。

目の前にきた釣り糸に夢中でつかまった。鉛をつかんでいるが、直ぐ下についている針がちくちくと手を刺す。こういうときはあまり痛くはないのである。

やっと堤防に引き寄せられ、はい上がると、『ワーッ』と歓声があがった。

『フーッ』と一息。

『こげんか大物の釣るっちゃ思わんじゃった。着物ば入るるなら八十キロはあろだん。今日は縁起のよかバイ……』。

冷え切っているうえに、また冷やかされて、カーッと顔がほてってきた。